

<b>Title</b>	歴史主義の不安からの解放？：〈超歴史〉と〈新しい中世〉
<b>Author(s)</b>	佐藤, 貴史
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-2 : 7-10
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2309">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2309</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 歴史主義の不安からの解放？

## —〈超歴史〉と〈新しい中世〉—

佐藤 貴史

### はじめに

近代以降の、より狭く限定すれば 19 世紀後半から 1930 年代頃までのドイツの思想世界において、多くの知識人が関わらざるをえなかった問題として、「歴史主義」(Historismus) をあげることができるだろう。エルンスト・トレルチの有名な定義を借りれば、それは「精神的世界のわれわれのあらゆる知と感覚の歴史化」であり、「われわれはここにすべてのものを生成の流れの中に、すなわち果てしなくつねに新しい個別化のうちに、そして過ぎ去ったものによって規定されつつ、知られざる未来的なものへと向かうことのうちにみる」(“Die Krisis des Historismus,” 437)。

あらゆる既存の価値は歴史の相の下におかれることによって、相対化され偶然性の中へと飲み込まれていく。このような「歴史主義の危機」のなかで、トレルチは歴史主義の地平にとどまりながら、新たな「文化総合」を模索したことは、よく知られている事実である。しかし、かかるトレルチの試みを真っ向から批判し、否定する若い知識人たちもいた。

この研究ノートでは、ドイツにおいて上記の問題を精力的に論じているエクスレ (Otto Gerhard Oexle) やグラーフ (Friedrich Wilhelm Graf) の研究を参照しながら、簡単なスケッチを描いてみたい。

### 1. 〈超歴史〉による解決？

歴史主義の問題とは、言い換えるならば「歴史と信仰」「歴史と規範」の問題である。神の啓示やイエス・キリストの神性でさえ、歴史の相の下におかれると、一回限りの偶然的な出来事へと還元され、超越的なものはこの世界における相対的なものへと引き下げられてしまう。18 世紀の後半以来、ドイツのプロテスタント神学もまた、歴

史による「思惟革命」の前で、自らの学問的アイデンティティの大きな変化を余儀なくされた。神学は歴史学の専門分野を自らのうちに取り込み、複雑で、あるときは矛盾したプロセスを歩みながら、「キリスト教の歴史的・解釈学的文化科学」(“Geschichte durch Übergeschichte überwinden,” 218) へと変わっていったのである。このような神学のあり方に激しく反対したのが、1920 年代の「神学的反歴史主義者たち」(Ibid., 222) であり、「宗教的アヴァンギャルド」(Ibid., 223) 「神のフロント世代」(“Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik,” 54) とも呼ぶべき若き知識人たちである。

彼らによって歴史主義という言葉は、「思惟のアナーキー」や「価値のアナーキー」、あるいは「荒廃」や「腐敗」などの否定的概念と結び付けられた。さらには「病氣」や「死」などの生物学的・医学的概念もこのような神学的議論の中で重要な意味を獲得することになった(“Geschichte durch Übergeschichte überwinden,” 222)。ヘルマン・ハイムペルは、「歴史主義的な相対主義」に対する神学的反歴史主義者たちの反抗を「反歴史主義革命」と呼び、諸学問から歴史が零れ落ちていくことを指摘した (Ibid., 221)。

神学的反歴史主義者たちは、「歴史的思惟によっては相対化されえない思考の場」(Ibid., 224) を探した。例えばパウル・ティリッヒは、その場を「あらゆる歴史内的で有限な場の絶対的危機」として描き、このような絶対的な場は本質的には「歴史の彼方にある現実性」の中にあると考えた (Ibid., 224)。神論もまた、彼らによって「無制限の主権性」「無制約性」「超歴史性」などの言葉で語られるようになり、フランツ・ローゼンツヴァイクのようなユダヤ人思想家は、きわめて神秘的な終末論を口にしだすようになった。

要するに、神学的反歴史主義者たちは新しい現実理解を求めていたのであり、ユダヤ教やキリスト教の終末論的シンボルや啓示論、そして神論を用いながら根本的に新しい時間解釈や歴史理解を展開したのである。彼らはこのような企てによって、あらゆるものを歴史の相の下でみる歴史主義をまさに〈超歴史〉によって克服しようとした。その場合、超歴史的なものをどこにみるかは思想家によってさまざまである。現在の瞬間、絶対的瞬間、終末論的現在、神の啓示、神の言葉——彼らは多様な語彙を駆使し、ときには新たに生み出しながら現実性を理解しようと努める。しかし、かかる試みがいかなる政治的意味をもっていたかは、さらに検討されなければならないだろう——グラーフ曰く、「反歴史主義的な神学者たちは、『終末論的現在』の『カイロス』を今度には相争う政治的秩序構想へと結びつけた」(Ibid., 238-239)。

## 2. 〈新しい中世〉による解決？

さて歴史／歴史主義を〈超歴史〉によって克服しようとする道をとらずに、この問題にけりをつけようとした知識人もいた。その際、鍵語となったのが〈中世〉あるいは〈新しい中世〉(Neues Mittelalter)であった。〈超歴史〉の神学とは別に、中世研究は「武器 (weapon) として用いられ」、その中世とは「近代性を批判するために近代性に対比しておかれた一つの想像された中世 (an imagined Middle) であった」。(Oexle, "German Malaise of Modernity," 34)。

すでにトレルチの歴史主義の定義をわれわれは確認しているが、歴史主義はこれまで自分たちが信じていた宗教や信念が実は何の根拠もないことを明らかにしてしまった。「歴史主義によって形成された 19 世紀の思考様式が含意していたのは、自ら自身の現在についての反省」が、あるいは「近代文化についての反省が近代性との関連において、近代以前の別の時代に対する考察として表現されていたことであった」(Ibid., 35)。まさ

に近代以前の別の時代とは、中世を指しており、現在を批判するために「想像された過去の表象」(Ibid.) が必要とされたのである。

例えば、ヤーコブ・ブルクハルトは名著『イタリア・ルネサンスの文化』(1860)において「世界と人間の発見」というテーゼとともに、中世の二重の重荷——共同体と信仰の権威——から解放されたルネサンスを高く評価した。しかし、彼は 1880 年頃を境にルネサンスへの高い評価を取り下げ、同時に「中世を背景としながら近代性の文明のプロセスを批判的に考察しはじめた」(Ibid., 37)。また 1873 年から 1896 年に起こった大恐慌によって「進歩への信仰」が力を失ってしまったことも、この問題に対する大きな社会的要因となった。こうして社会的動揺が生じ、実存的不安が人々を襲ったのである。ゲッティンゲンの神学者パウル・デ・ラガルドは、近代批判を通して「新しい国民的でドイツ的な宗教」を創設しようとした (Ibid., 38)。フェルディナンド・テニエスは、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(1887)のなかで「近代」社会に対する中世的「共同体」の意義を語り、個人における「自然的」で「有機的」な結びつきを回復しようとした。こうして中世は、価値の分裂した歴史主義の時代に対して「政治的・社会的想像力」(Ibid., 38)をかき立てるような時代となっていったのである。

哲学者パウル・ルードヴィヒ・ランズベルクは 1922 年に『中世世界とわれわれ』という書物を出版し、中世あるいは〈新しい中世〉——「新しい中世」という考えをランズベルクはノヴァーリスの『キリスト教、あるいはヨーロッパ』(1799)から得ている ("Das Mittelalter als Waffe," 177)——の意義を強調した。彼によれば「この新しい中世は歴史主義とあらゆる歴史化を克服するであろう。なぜなら新しい中世においては、近代のように『歴史』について誰も何も気にかけることはなく、むしろ『存在』に関心を示すからである。この新しい中世は『真の若く創造的な人間』、すなわち新しい『われわれ』によって実現されなけ

ればならなかった」(Oexle, “German Malaise of Modernity,” 40)。

歴史家エルンスト・カントロヴィッチもまた、〈新しい中世〉の言説へと連なった一人である。彼にとってドイツにおける「歴史叙述」(Geschichtsschreibung)は、「国家的な課題」や「義務」をみようとしなかった。結果的に彼は「歴史叙述の国家化」を試みたのである (Ibid., 50)。またニーチェの影響の下で、学問としての歴史叙述は生あるいは国家への信仰に奉仕をすることを求められた (Ibid., 51)。『『真理』は『国民』や『ドイツ性』として定義』され、カントロヴィッチの『皇帝フリードリヒ2世』はこの目的のために書かれた。彼はフリードリヒ2世を「覚醒した若きドイツ」の時代における「特殊ドイツ的な価値の具現者」として仕立て上げ、「全体性と共同体の精神の中で彼を中世化した」(Ibid., 51)。こうして彼らにとって来るべき新しい時代は、〈新しい中世〉と考えられるようになっていったのである。

## おわりに

〈超歴史〉であろうと、〈新しい中世〉であろうと、彼らの試みは歴史主義の不安から解放されるための真剣な思想的格闘であった。〈超歴史〉によって、これまでの伝統や慣習を無に帰し、生成の中にある世界史に絶対的な場を創造しようとした神学的反歴史主義者たち、あるいは歴史感覚にまだ囚われていない〈新しい中世〉という時代を想像——中世に戻るのではない！——することによって、価値の分裂から価値の統一や全体性に向かおうとしたランズベルクやカントロヴィッチ——彼らの思想的格闘が成功したかどうかは、今日の思想的状況をみれば明らかである。

かつてグラーフは「近代はすでに以前からポストモダンであった」(Graff, *Die Wiederkehr der Götter*, 229)と書いたが、歴史主義の問題はポストモダンの開始を示すものであったかもしれない。明らかに価値は多元化しているが、しかし同

時にあらゆるシンボルを駆使しながら人々の欲望が束ねられていく現代世界にあって、一体われわれは何を語るべきか、というよりもそもそも何を語ることができるのかという根本的な〈不安〉に囚われている。そのとき、おそらく現代よりも多種多様な言説が渦巻いていた20世紀初頭のドイツの思想的経験が、われわれに何かを間接的に、そして断片的に教えてくれるのでないだろうか。

## 参考文献

Ernst Troeltsch, “Die Krisis des Historismus,” in *Kritische Gesamtausgabe. Schriften zur Politik und Kulturphilosophie (1918-1923)*, Bd. 15, herausgegeben von Gangolf Hübinger in Zusammenarbeit mit Johannes Mikuteit (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2002).

Friedrich Wilhelm Graf, “Geschichte durch Übergeschichte überwinden. Antihistoristische Geschichte in der protestantischen Theologie der 1920er Jahre,” in *Geschichtsdiskurs. Krisenbewußtsein, Katastrophenerfahrungen und Innovationen 1880-1945*, Band 4, Fischer Taschenbuch Verlag: Frankfurt am Main, 1997.

———. “Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik,” *Jahrbuch des Historischen Kollegs*, 2004.

———. *Die Wiederkehr der Götter. Religion in der modernen Kultur*, München: Verlag C. H. Beck, 2004, 2. durchgesehene Auflage 2004, 3. durchgesehene Auflage 2004, 1. Auflage in der Beck’schen Reihe, 2007. (序言と第1章のみ邦訳あり。安酸敏真訳『神々の再来——近現代文化における宗教』(抄訳)、北海学園大学人文論集、第34号、2006年7月)。

Otto Gerhard Oexle, “»Historismus«: Überlegungen zur Geschichte des Phänomens und des Begriffs,” in *Geschichtswissenschaft im Zeichen des Historismus. Studien zu Problemgeschichte der Moderne*, Göttingen:

Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.

———. “Das Mittelalter und das Unbehagen an der Moderne. Mittelalterbeschwörungen in der Weimarer Republik und danach,” in *Geschichtswissenschaft im Zeichen des Historismus. Studien zu Problemgeschichte der Moderne*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.

———. “Das Mittelalter als Waffe. Ernst H. Kantorowicz’ »Kaiser Friedrich der Zweite« in den politischen Kontroversen der Weimarer Republik,” in *Geschichtswissenschaft im Zeichen des Historismus. Studien zu Problemgeschichte der Moderne*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.

———. “German Malaise of Modernity: Ernst H. Kantorowicz and his “Kaiser Friedrich der Zweite”,” in *Ernst Kantorowicz*. Robert L. Benson/Johannes Fried (Hg.), Stuttgart: Steiner, 1997.

———. “Die Moderne und ihr Mittelalter. Eine folgenreiche Problemgeschichte,” in *Mittelalter und Moderne. Entdeckung und Rekonstruktion der mittelalterlichen Welt*. Peter Segl (Hg.), Sigmaringen: Thorbecke, 1997.

「これはドイツ・プロテスタント教会奨学金 (Diakonisches Werk der Evangelischen Kirche in Deutschland) による研究成果である」

(さとう・たかし 聖学院大学総合研究所特任研究員)